
お馬怪盗と悪魔の麻薬

暁月 麗華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お馬怪盗と悪魔の麻薬

【Nコード】

N2439Y

【作者名】

暁月 麗華

【あらすじ】

宝石怪盗をやっている青年セヴィスは、学校で最下位の成績を取りながら、秀才の兄ウィンズとともに暮らしていた。だが、ある日盗んだ真紅の宝石によって、異世界にトリップしてしまう。

その世界は、全く同じ人間が住んでいるのに宝石を主食とする悪魔が出没したり、人間を激変させる麻薬があったり、学校が悪魔退治をする『ネクロス』の養成学校になっていたりと、何もかも変わっていた。

それでも懲りずに異世界でも宝石怪盗を始めたセヴィスは、狂った性格をした銀髪の悪魔シュバルツにことごとく邪魔をされるのだった。

序章 真紅の宝石

今日は、兄のウィンズに馬鹿にされるだろう。

教師に渡された茶色の封筒を見て、セヴィス「ラスケティアは思った。

昔のウィンズは、この封筒を開く度に偉そうな顔をしたという。

だがセヴィスから見れば、これはウィンズの機嫌を良くするものであり、自分の機嫌を悪くするものでしかない。

こんなもの、作る方がおかしい。こんなもの、何の為に存在するのだろう。

でも、見ないといけない。

セヴィスは教室に誰もいないことを確認し、封筒の中身を取り出した。

成績表と呼ばれる、忌々しい白色の厚紙に記された数字は、やはり五百分の五百だった。

「また最下位だったな」

突然セヴィスの横から現れたのは、幼馴染のハミル「スレンダーだった。

「お前つどこに隠れて……」

誰もいないと思っていたセヴィスは、驚いて成績表を落とす。

「はははっ放課後にセヴィス一人が残ってたら絶対成績表を見てるもんな。だから脅かそうと思って隠れてたんだ。いつも銅像みたいに無表情なお前が、あんなに驚くと初めて見たから思わず笑っちゃまったぜ」

ハミルは成績表を拾ってまじまじと見つめる。

「へえー体育の成績だけはすげーな」

「テストなんて、どうでもいい」

と言って、セヴィスはハミルから成績表を勢いよく奪い取って鞆に

入れる。

「出た！名言！お前テスト終わったらいっつもそれ言うつよな」

「本当のことを言って何が悪い」

「別に？・・・ていうかさ、お前おれから成績表奪うのすげー速くなかったか？」

セヴィスから返事はない。

「お前なら泥棒できたりして？まあこれ以上怪盗が増えるのは嫌だけれどな」

「・・・」

「聞いたか？また怪盗フレグランスの予告状来たんだってよ」

ハミルの父は『怪盗フレグランス特捜課』に所属している。その父を尊敬しているのか、ハミルはよく父の自慢話やフレグランスへの悪口を言ったりする。

それも、セヴィスはどうでもいい、の一言で済ましていた。だが、例外がある。

「予告状の通り盗むとしたら、今夜だよなあ。今回の宝石があるビルは窓ガラスが頑丈だし、さすがのフレグランスでも割れないだろう？だとしたら逃げる場所が入口しかない。だから親父は入口に警察を集中させるんだって」

「そうなのか」

この話だけは例外だ。警察の防備情報を聞けるのは、このハミルと話している時だけだからだ。怪盗フレグランスの立場からすれば、この話を聞き逃すわけにはいかない。

「あれ？珍しくどうでもいい言わなかったな」

「そんなことどうでもいい」

「あ、言っ たな」

「・・・帰る」

「おい待てって！おれを置いてくなよ！」

セヴィスはいいい情報が聞けたと思うと、本当に成績はどうでもよくなった。

ハミルはいちいちしつこくて、時には邪魔とを感じるが、怪盗からすればハミルの存在は重要だった。

「なあ、お前のロッカーにこんなもん入ってたぜ」

セヴィスが学校を出る数分の間に、いつの間に人のロッカーを開けたのか。ハミルは路上でたくさんの白い封筒をセヴィスに見せつける。だが、セヴィスはこの封筒を知らない。

「何だこれは」

「おれは知ってるぞ。これラブレターだろ。この色男め」

「ラブレターだと？」

ハミルは封筒に貼られたハート型のシールをはがし、一枚の便せんを取り出した。その差出人を見てハミルは目を見開く。

「おいおい嘘だろ？ルビアちゃんだぜ？これ。おれあの子狙ってたのになあ」

ルビアという少女は、学校内では有名ならしい。だが、セヴィスはこれもまた知らなかった。

「ルビアとは……誰だ」

「知らないのかよ！？ルビア「クォーツ」といえば、学校一のお金持ちだぜ？」

「興味ない」

後ろでハミルのため息が聞こえた。

「そんなこと言っていると、誰にも好かれなくなるぜ。モテるうちに彼女作つとけ。おれなんか、好きだって言ってもいつもごめんなさいの一言なんだぜ」

「生きて行く上で、女に好かれる必要はない。いるだけ重荷だ」
怒っているのか、黙ってハミルはラブレターを見つめている。

「大体お前は何人の女を狙ったら気が済むんだ。何回フラれても懲りないのか」

「へっおれは女の子と正義の味方だからな。だから美しい宝石を盗

んで女の子を悲しませるフレグランスは絶対許せねえ」

ハミルはどうしてすぐに開き直ってフレグランスの話題にしてしまうのだろう。こんな話題は、セヴィスを複雑な気分にするだけだ。と言うより、ハミルの話題全てがセヴィスを複雑にしていると言ってもいい。

「お前もな、この手紙をお前のロッカーに入れる女の子の気持ちを考えて」

ハミルは手紙の束をセヴィスに押しつけると、くるりと背を向ける。「じゃあな」

そう言つて、ハミルは目の前にある自分の家に入つていった。こんな紙きれ貰つて、嬉しいのだろうか。セヴィスにはハミルの気持ちが分からなかった。

分かったのは、フレグランスの存在は宝石好きの女に憎まれているということだけだ。だが、いくら女に嫌われようと所詮は他人。セヴィスには関係ない。

そう思つて、セヴィスは鞆にラブレターを突っ込む。それが、あの成績表の茶色の封筒に入つたことにセヴィスは気付かなかった。

ハミルの家の隣に、自分の家はある。ドアノブを握ると、テストの結果を馬鹿にするウインズの偉そうな顔が頭に浮かぶ。

そう思うと入る気が失せる。そこでセヴィスはいつものどうでもいい思考を発動する。テストのことを忘れ、家の扉を開けるという我ながらなんともくだらない思考だ。

「ただいま」

家に入ると、おいしそうな匂いが漂ってきた。どうやら、ウインズがハンバーグを焼いているらしい。ウインズが脂っこいものを作るのはなんとも珍しい。

いつも栄養分を細かく計算し、おいしくもない健康的な食事を作っているあのウインズが、ハンバーグを作っている。

「珍しいこともあるものだな」

セヴィスは一言呟いて、ウインズのいるキッチンに入る。すると、

「遅いぞ。貴様、帰宅時間五時から三十秒遅れたな」

後ろを向いたままウインズが言った。

「三十秒くらい、別にいいだろ」

「罰として、お前のハンバーグは抜きだ」

「なっ……」

「今日のお前の夕食はこのウインズ様特製健康促進定食だ。光栄に
思え！はーっはっはっはっは！」

セヴィスは舌打ちしようとする自分を堪える。ウインズが高笑いす
るときはいつもセヴィスが馬鹿にされた時だ。こうなったら反抗し
ても全く話を聞いてくれない。

「何がウインズ様特製健康促進定食だ。ただの玄米を山盛りにした
だけだろ」

「何か言ったか、馬鹿弟」

ウインズはセヴィスを睨みつけてきた。

だがその顔を覆う鉄仮面を、ウインズは何故か料理中に着用して
いる。それも眼鏡をつけた上に鉄仮面だ。

前にこの鉄仮面を初めて見たハミルは、笑いが止まらなくなった。

「その鉄仮面、止めた方がいいと思う」

「何故だ？料理に唾が入っては不潔だからな、このくらいは当然だ
ろっ？」

「……クソ神経質が」

「フツ。料理^{エサ}が出来だぞ。たとえ喰らうがいい」

ウインズは鉄仮面を外し、料理を机に並べる。その献立はどう考え
てもおかしい。ウインズ側には、美味そうなハンバーグ二枚に適量
の野菜、白米だ。そのハンバーグは元々セヴィスの分だった。

それに比べてセヴィス側には、大きな茶碗に玄米の大盛りに、生の
野菜、生卵。これが不味いウインズの健康促進定食。ウインズに逆
らうと夕食はいつもこれだ。

「どうした？まさかこのウインズ様特製健康促進定食が気にいらな

いとも言つのか」

「ああそうだ」

「では、不意だが貴様にチャンス을 くれてやろう」

と言つてウインズは水を一杯飲み、眼鏡を指で一度押し上げる。

「今日は貴様の成績表が返つて来たのだから？それが一番だったら、このハンバーグをくれてやろう」

「はあ……」

ウインズが絶対に無理な条件を押しつけて、それができない人を笑うのは昔からだ。チャンスという時点で期待をするべきではなかった。

「フツどうせお前のことだ。また馬鹿みたいな番数を取つて来たのだから？」

「……」

セヴィスは黙つて茶色の封筒を取り出してウインズに渡す。それをウインズは慣れた手つきで開けて、成績表を取り出す。成績表を見たウインズはすぐに笑いだした。

「はーはっはっは！また最下位だと？笑わせるな！冗談も程々にしたらどうだ！」

「冗談じゃない。事実だ」

「こんな番数を取つてよく冷静でいられるな！僕なんて一番を譲つたことなど誰にもなかったぞ！」

「兄貴は特別なんだ。仕方ないだろ」

「全く、どうやったらこんな点数を取れるのだ」

そう言いながら、ウインズは成績表を封筒に戻そうとする。すると、何かが引つ掛かつて入らない。

「何だ、入らないぞ」

ウインズは封筒に手を突っ込んで中に引つ掛かっていた物を取り出す。

「セヴィス、これは何だ」

ウインズが取りだしたのは、先程ハミルがくれた女の子たちのラブ

レターの束だった。

「あつ」

取り返そうとするセヴィスを振り切って、ウィンズは便せんを声に出して読み始めた。

「『親愛なるセヴィス様へ。わたくし、あなたのことが気にいりましたの。よかったら付き合って下さいませんか？返事はいつまでもお待ちしています。ルビアより』……だど？」

「……」

セヴィスは頭を抱えて、黙りこんだ。

「貴様のような馬鹿を氣にいる女がこんなにもいるとはな。最近フレグランスと言う名の愚かな怪盗も出る。本当にこの世界はどうかしている」

それからセヴィスは一言も話すことなく、夕食を済ませた。

夜十時半、セヴィスはベッドから下りて部屋の窓から飛び降りる。

ウィンズは毎日必ず十時に就寝し、五時に必ず起きる。彼の生活時間は絶対厳守なのだ。

それに、その間は絶対に起きない。気付かれることはない。

セヴィスはこれを利用して仕事をしていた。仕事というのはもちろん、泥棒だ。

予告状の予定は十一時。十時半に、セヴィスのやる気のない死んだ目が開く。

（俺の名は怪盗フレグランス。嫌われようと関係ない）

セヴィスは、生まれつきの体術で屋根の上を飛び移る。何故こんなに人間離れた跳躍力を持っているのかは、セヴィス自身も知らない。

今日盗むのは、最近発見された未知の真紅の宝石『ブラッド・エヴィデンス』だ。

高値で買い取るから、どうしても欲しいという他国の人間が続出し

ているからだ。セヴィスは、そんな人間たちに宝石を売って金を稼いでいた。

セヴィスが金を稼ぐ理由は、特にない。ただ盗むのが楽しいというだけだ。

「・・・・・・・・」

宝石のあるビルの前にはたくさんの警察が立っている。入口の反対側に回り込んだセヴィスは、屋根からビルの二階の壁に飛び移った。「スレンダ課長！今のところフレグランスの姿は見えません！」

「奴は近くまで来ているはずだ！十分に警戒しろ！」

ハミルの父ミストの声が聞こえた。警察はまだ自分に気づいていない。そのことを確認したセヴィスは、窓に自分の短剣を差しこみ、鍵を上を押上げて、窓を静かに開ける。

この窓はハミルの言う通り割って侵入するのは不可能だ。でも窓は鍵さえなんとかすれば簡単に開く。たかが窓にこの怪盗フレグランスは敗れはしない。

中は真っ暗で、誰もいない。セヴィスの十メートルぐらい前に、その真紅の宝石はあった。

「見つけた」

だが、誰も警備していないというのも変だ。セヴィスは辺りを十分に見回す。やはり誰もいない。ハミルの言っていた、入口に集中させるというのは本当だった。

宝石を守るガラスの蓋を取って、真紅の宝石を盗る。

防犯ベルが鳴り響く。

「フレグランスが出たー！」

ミストの声が聞こえた。これで何度目だろうか。ミストの、

「しまった！」

という声を聞くのは。聞く度に、笑えてくる。

セヴィスは入ってきた窓から外に出て、再び屋根に飛び移る。

今回は楽だった。

家に戻ってきたセヴィスは、いつものように、真紅の宝石をベッドの下に宝石箱に入れようとした。

すると、どこからか声が聞こえてきた。

『ねえ、悪魔と戦ってみな〜い?』

「だっ誰だ?」

焦ったセヴィスは窓や扉を見回す。誰もいない。

『ブラッド・エヴィデンスを手に入れるなんてすごいわぁ。普通の人間が触ったら燃え尽きちゃうんだけどね』

「この宝石が喋っているのか?」

『ああ、わたし悪魔の頭領のサキュバスっていうのぉ』

「悪魔?」

『わたしたちの世界はことと同じ人間が住んでるけどね、悪魔も住んでるのぉ。今度からわたしの世界のセヴィスⅡラスケティアとあなたで交代してもらおうかなあ〜って思ってるのぉ』

「何を言っているんだ……?」

セヴィスは、悪魔の頭領サキュバスの言っていることが理解できずベッドに潜る。

『逃げてても無駄よぉ。明日からあなたにはこっちに来てもらっからねえ』

これは幻聴だ。宝石が喋るはずがない。

そう思ってセヴィスは眠った。

序章 真紅の宝石（後書き）

少し苦手な学園モノに挑戦しようと思って書きました。

そう思ってたなら、怪盗モノと悪魔モノも混ぜてきていると力オスな話になりそうです（汗）

あと上手くいけば下手クソな差し絵も投稿していきたいです（笑）
文章も下手クソですが、

アドバイスがあればよろしくおねがいしますorz

1 悪魔の世界

「おい」

ウインズの声が聞こえる。

「おい、起きろ」

怒っているのか、語気が強くなった。

「起きろと言っているだろう!!」

はっとしてセヴィスが起きると、隣に眼鏡を光らせたウインズが立っていた。

「いつまで寝ているつもりだ。貴様のせいで僕が仕事に遅刻したらどうする」

遅刻とはいえ、ウインズはいつも職場に三十分以上前に着いている。今更遅れても何もない。

「俺なんか置いて行けばいい」

「駄目だ。成績最下位の貴様が遅刻したら、また保護者会で僕が面倒な目に遭ってしまう」

ラスケティア家に父と母はいない。優しかった母は病気で亡くなり、温厚な父は理不尽な事故に遭って亡くなった。なので、親の役目は全てウインズが受け持っている。

それに比べてセヴィスは家では何もしていなかったが。

「僕はもう行くぞ。朝飯は下に置いてあるからな」

そう言つて、ウインズは部屋を出て行った。いつもの朝の風景だ。

「・・・・・・・・」

『ねえ、悪魔と戦ってみない?』

ふと、昨日の悪魔の言葉が蘇った。悪魔の頭領を名乗るサキュバスは、明日自分たちの世界に来てもらうと言っていた。

だが今日になつても、世界は何も変わっていない。

「やっぱり夢か・・・・・・・・」

セヴィスは、ベッドから降りて宝石箱を開ける。もし今までと世界

が変わらないなら、あの真紅の宝石は必ずここに入っている。

セヴィスは宝石箱を開ける。

「！」

そこに、昨日盗んだはずの『ブラッド・エヴィデンス』の姿はなかった。

「ない」

辺りを見回してもそれらしきものはない。

もしかして、ここはサキュバスの言っていた違う世界なのだろうか。それでも、『ブラッド・エヴィデンス』以外の宝石はちゃんと揃っていた。

「おいセヴィス！学校行こうぜ！」

外から声が聞こえた。窓から顔を出すと、下に制服姿のハミルが立っている。

「ハミル？」

ハミルは昨日までと何一つ変わっていない。やはり世界は変わっていないのだろうか。

そんなことより、こんな時間に学校に行つてどうするのだろうか、とセヴィスと思う。少なくともセヴィスが起きる時間に行つても学校は開いていないはずだ。

「えっ」

壁に掛かっている時計を見たセヴィスは驚愕した。

「おい」

ハミルが呼んでいる。

「今行く！」

セヴィスの人生初の寝坊だった。

ウィンズの朝食を食べずに、セヴィスは外に出る。道路で随分待たされたハミルは少々機嫌が悪かった。

「セヴィスが寝坊、か。珍しいこともあるもんだな」

ハミルは変な目でセヴィスを見てくる。

「珍しいのか」

「だってよお、兄貴のせいで早く起こされるって面倒くさそうに言
つてたのお前だろ」

「そうだな」

「おれなんていつつも夜はフレグランスのこと考えてるから寝坊は
しばしだけだな」

セヴィスは黙って歩き出す。ハミルはそれについて来る。

「・・・・・・・・」

「やっぱり警察を入口に集めたのは間違いだったな。いくら強い窓
でも、怪盗フレグランスには敵わないってのか」

ハミルはまたフレグランスの話を始めた。セヴィスからすれば勘弁
してほしいの一言だったが、それを言うわけにはいかないので、結
局「どうでもいい」の一言で終わらせることしかできなかった。

今やセヴィスの口癖にもなってしまったこの「どうでもいい」は、
ハミルが二度とフレグランスの話をしないようにするために言った
言葉だった。無論それは、全くと言っていい程効果が無く、現在ハ
ミルがフレグランスの話をしているのが現状だ。

「でもやっぱり信じられねえよ。あのセヴィスが寝坊って…………

」

「しつこいぞ、ハミル」

「もしかしてさ、昨日悪魔に襲われたとか？」

ハミルの言葉を聞いた途端、セヴィスは横断歩道の前で足を止めた。
「悪魔？」

昨日の出来事をハミルが知る訳がない。セヴィスは無意識にハミル
を睨みつける。

「そうだよ。最近、悪魔の野郎に襲われる人間が増えてるんだ。だ
から俺らが通うネクロス学園があるんだろ？」

ハミルは道路の真ん中で得意げに言う。

二人が通うネクロス学園は、至って普通の学校だ。悪魔という未知の生物と何の関係もない。

「ネクロス学園と悪魔に何の関係がある」

セヴィスは素直に思っていたことを言った。

「はあ？お前何言ってたんだ？？」

正直なセヴィスの言葉を聞いた途端、ハミルは横断歩道の信号が赤になっているにもかかわらずセヴィスの方へ戻ってきた。

「寝ぼけてんのか？」

「っ！」

怒っているハミルから目を逸らしたセヴィスは、彼に迫るものを見て息を呑んだ。

前しか見ていないハミルは気づいていないが、物凄い速さで大型車が迫っている。さらに、車の運転手は眠っていた。これでは止まらない。

「ハミル危ない！」

セヴィスは叫ぶ。

だが、ハミルは大して驚く様子も見せず、ゆっくりと横を見る。車は既にハミルまで十メートルは切っている。

あれでは撥ねられる。

「へっこれくらい！」

ハミルが車と接触しそうになった瞬間だった。

セヴィスは自分の目を疑う。周りにいた人々も驚いて歓声をあげている。

「ハミル？」

ハミルは、車を右手の掌だけで止めたのだった。

「おれの魔力権に車なんかが敵うわけねえだろ」

「ま、魔力権？」

「セヴィス、何驚いてんだお前？いつものお前なら、いくらおれが自慢しても『どうでもいい』で終わらせるくせによ」

そう言われても、セヴィスはハミルが車を片手で止められる程の力

があるとは思えない。

「まあおれもお前の魔力権には敵わないけどな」

「何のことだ」

「……お前さ、やっぱり悪魔に襲われたショックで記憶が飛んでるんだろ？ただでさえ驚くことがないお前がおれの魔力権でそんなに驚くわけがねえ」

「知らないものは知らない。その事実は何も変わりはない」

ハミルは怪しげにセヴィスを見つめて、

「この世界で悪魔もネクロスも魔力権も知らない奴なんて重症だ」と言った。

「なあ、お前本当にセヴィスなんだろうな？」

セヴィスは疑われるはずのハミルに疑われた。

サキュバスは言っていた。自分たちの世界のセヴィス＝ラスケティアと代わってもらうと。そんなことをして何になるのだろう。

セヴィスに交代する理由は分からなかった。

「おれとお前は、頭領サキュバスを始めとする悪魔の野郎を倒すために、ネクロス養成学校に入ってるんだろうが！」

「そう……なのか」

このとき、セヴィスは確信した。この世界は、今まで自分が住んでいた世界とは違う、サキュバスの世界なのだと。自分は、本当に悪魔が住む空想のような世界に来てしまったらしい。

とりあえずこの世界のことを知るには、ハミルに嘘をついて聞き出すしかない。

「ハミル」

「あ？」

セヴィスが話しかけても、ハミルの不機嫌は治っていない。

「お前の言う通り、俺は昨日悪魔に襲われたのかもしれない。そんな記憶がつつすらと残ってる」

「やっと白状したか」

「だから、いろいろ教えてくれ」

「お前がおれに頼み事か……まあお前が知らないといろいろと不便だしな。分かったよ」

ハミルに頼むのめ気が引けるが、仕方ない。悪魔のことを知らないとおそらくサキュバスに馬鹿にされるだろう。それどころか怪盗業にも支障が出るかもしれない。

もちろんこの世界の怪盗フレグランスのことは、ハミルから自然に聞きだせるので聞く必要はない。

「何から説明すればいいんだ？……やっぱり悪魔からか。魔力権に関しては図書室で教えてやるからよ」

セヴィスに頼りにされて喜んでいるのか、ハミルは一人で考えている。

「悪魔っていうのは、この世界に住みつく奴らんだけどさ、宝石『ブラッド・エヴィデンス』を主食としているんだ」

「宝石を？」

「そう。『ブラッド・エヴィデンス』を食べないと奴らは生きていけない。

十年前、悪魔は世界を支配しようとしたけどな、ネクロスという一人の男に阻止された。『ブラッド・エヴィデンス』はその時この国の美術館や宝石店に散らばったんだ。そのせいで悪魔は『ブラッド・エヴィデンス』を求めて夜に人間を襲ってる。奴らのやることは本当に甚だしいぜ」

真紅の宝石『ブラッド・エヴィデンス』。昨日セヴィスがそれを盗まなければ、この世界に来ることはなかっただろう。この世界でもその存在はかなりの影響を与えている様だ。

「宝石を渡せば済むってもんじゃねえ。どれだけの宝石を渡しても、悪魔の奴は必ず人を襲う。それに、

『ブラッド・エヴィデンス』を渡しすぎるとまた十年前のことが起つちまうまう。だから、ネクロスの様に悪魔から人を守るためにおれたたちが通うネクロス養成学校があるわけだ。まあ悪魔に関しては

こんなもんか」

ハミルは丁度学校に着いたのを確認して、話を止める。

「じゃあ魔力権について説明してやるから、図書室に行こうぜ」
そう言ったハミルだったが、動こうとしない。

「どうした」

「あの子可愛いな。ちょっと待っててくれ」

「おい……」

ハミルのナンパ癖はこっちの世界でも一緒だった。

「お嬢さん、おれと一緒に……」

「あら？筋肉馬鹿のハミルさん？」

ナンパした少女は黙っている。言ったのはその隣にいた少女だ。少女は人を見下す目で、ハミルを見ている。

ハミルはこれが誰だか知っている。学園一の大金持ち、ルビア「クオーツ」だ。

「えっ筋肉馬鹿？」

「そうそう。あなたはわたくしの一番嫌いな人種ですの。あなたの友人のセヴィスさまはいらっしゃらないの？」

セヴィスさまという表現にハミルは少し焼き餅を焼いた。

「セヴィスはあっちにいるけどさ、いくらなんでも筋肉馬鹿って……ぐえっ！」

鳩尾に肘を叩き込まれてハミルは苦しんでいる。そんなハミルに目もくれず、ルビアはセヴィスの方に走ってきた。

「昨日のお手紙、読んでいただけました？」

ルビアは昨日のラブレターのことを言っているのだと、セヴィスは理解した。

「ああ、読んだ」

「お返事を聞かせて頂けませんか？」

昨日の出来事のせいで、ルビアのラブレターのことはすっかり忘れていた。考える暇さえなかった。そもそもこの女と一緒にいたいと思わないが。

「悪い。俺は女に興味ない」

と、セヴィスは素直に言う。これで諦めるのが普通の女。だが、

「うふふっわたくしは諦めませんわ」

ルビアには逆効果だったようで、ルビアは笑顔のまま少女と一緒に去って行った。

「全く、こんな俺のどこがいいのか分からない」

セヴィスは玄間でぼそつと呟いた。

怪盗フレグランズは女に嫌われているはずなのに、セヴィスは好かれていた。

そんなセヴィスをハミルが恨みの目で見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2439y/>

お馬怪盗と悪魔の麻薬

2011年11月23日11時46分発行